

「村の子」



鈴木 岬

俳画塾主宰 元高遠町図書館長
伊那市社会教育委員
(高校12回) 伊那市高遠町在住

村からほとんど出たことのない女の子が、毎日バスに乗って伊那の高校へ通うということは、嬉しいというより大変なことでした。

病床の母が、私の進学を父にどうしても頼んでくれたからでした。
母もまたその母の病気のために、家の犠牲となって「女学校」への進学を諦めた辛い思いがあったからです。

昭和32年、今から思えば戦後の色濃く、皆貧しさに耐えていた時代でした。

朝、カマドでご飯を炊き、芋か大根の味噌汁を作り、山仕事に行く父の弁当を作り、寝ている母の手の届く位置におむすびを置き、兄や弟にも食事の世話、着るものの心配、火の始末、それから走って15分、高遠駅から8時15分のバスに乗れたら上々で、
大概是、25分発か、35分のバスになってしまうことがしょっちゅうでした。

入舟というバス停で降りて、学校まで また走って15分程。気がつけば首のあたりや腕の裏側などに、カマドの炭がついたままということもしばしばでした。

学校では、町場から通ってくる美しい生徒たちには 気後れして話もできず、先生に苗字で呼ばれることも、広い校舎も、制服も、村のお店くらいなんでもある購買部、等々すべて おどおど どぎまぎの村の子でした。

そんな中で唯一楽しく適応できたことは、絵を描くことでした。
選択もクラブも美術を選び、一年生で早川先生、二年生で安川先生、三年生では板山先生と 三人の画家との出会いは、その後の人生において貴重な糧となりました。

あれから50年、職業もいくつも変わり苦勞しましたが、人生の山河を超えた今、ささやかながら俳画塾を営み、ようやく平原を歩いている気分です。

たった三年間ですが、高校生としての“時”は、果実の芯のように人生の核となっております。